
副隊長取替え祭

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

副隊長取替え祭

【Nコード】

N4086H

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

総隊長の急な思いつき(?)により、七緒と乱菊が入れ替えになった！こんな緊急事態で、業務は勤まるのか！？ドタバタコメディ、お楽しみ下さい。

第一章

「…なんスか、この…企画つつーか、なんつつーか…」

日番谷は、言葉を濁した。それもそうだ、こんな紙を見せられては濁さずにはいられない。

「分からんかの？ 『副隊長取替え祭』じゃ！」

「いや、少なからず祭りじゃないと思うんスけど」

冷静に突っ込みを入れながら、その紙を眺めていく。それには、こう書いてあった。

『十番隊副隊長、松本乱菊と、八番隊副隊長、伊勢七緒を七日間取り替える』

——…いやいやいや、ありえないだろ。

日番谷がまず思ったのは、それだった。他の隊はどんな組み合わせなのか、なんてことは思わず、とにかく完全否定をしたかった。しかし、総隊長直々の催し企画だ。女性死神協会が企てた悪質なイタヅラなら「断る」の一言で全てが片付くのだが、今回はそうもいかない。その点では、一番「厄介」である。

「…せめて、六番隊との交換に変更してもらえないんスか」
「だめじゃ」

六番隊なら、白哉がいる。乱菊もともに働くだろうとは思った。しかし、京楽のところだ。永遠にお酒を飲み続けるんじゃないか。そんなことが安易に予想はできる。

「大体、何の為にこんな事するんスか？」

「それは最後になれば分かる。とにかく四の五の言わんとっかえて来い」

断りきれない、威圧を感じた。日番谷は、これ以上の長居は無用だろうということを察知して、その場を去って行った。

「たいちよー！　これから一週間隊長に会えないなんて悲しいですー！！」

執務室に入ると、ドアを開いた瞬間目の前にあったのは、乱菊の豊かな胸。危うく、押しつぶされるところであつた。

「…お前、顔が笑ってんぞ。何が『悲しい』だ。『嬉しい』の間違いじゃねえのか」

冷たくあしらうと、「さつさと行け！　予定時間に遅刻すんぞ！」と今日で最後になるだろう怒号を乱菊に浴びせ、机についた。それから間もなくして、息を切らした伊勢が到着する。

「申し訳ありません、日番谷隊長。少し…遅れてしまいました」

「いや、遅れたって…たった数分じゃねえか。気にしねえよ」

なんせ、普段何十分も何時間も待たされているのだ。それに比べれば、このくらいの遅刻は大したものではないだろう。

「それに…お前も俺と同じだろ」

「え？」

「…これからしばらくしないであろう説教をしてた、って事だ」

日番谷の翡翠が、七緒の眼鏡にスツと映りこんだ。七緒は小さく、「はい」と答える。

「んじゃ、早速で悪いが、仕事、手伝ってくれるか？」
「喜んで」

眼鏡をきりりと上げて、副隊長専用の机について、筆を握った。

「きょーらくたいちょー」
「おおっ、来たねえ」

先ほどお互いはお互いの隊長・副隊長に怒声を浴びせられてたというのに、そんなことはすっかり忘れ、明るく元気に会話をしている。きゃぴきゃぴと仲良く話すその姿はまるで初めから隊長と副隊長の関係だったかのようだ。

「それじゃー最初は記念ってことで、お酒でも飲もうか、仲良く！」
「いいですねー」 京楽隊長、サイコーですっ！「！」

でかすぎるボトルがでん、と出てきて、それに似つかない小さなお猪口がちよこん、とボトルの隣に人形のように置かれていた。

「いやあ、七日間、ずっとお酒が飲めそうですねえ」
「乱菊ちゃんはお酒が強いし、七緒ちゃんと違って堅くないから嬉

しいなあ」

お酒を飲む前から、二人はこの夢のような状況にすでに酔っていた。むしろ、出来上がっている。このままだと、七日間ぶっ続けで宴会が行われてしまいそうだ。それくらいの勢いである。結局、八番隊は今のところ、日番谷と七緒の予想通りの展開を遂げていた。

「あつ、浮竹！ 君もどうだい？ 一杯くらい」

「京楽……。そうか、京楽のところは彼女が来たんだね」

明るい笑顔の浮竹が、都合よく、というか、運悪く、というか、とにかく八番隊の前を通り過ぎた時、京楽が立ち上がった。無理矢理浮竹にお猪口を持たせて、乱菊も楽しそうにその様子を見ているとき、乱菊の視界に赤いものがちらついていた。

「あ……乱菊さん。こんちわっす」

「恋次！ そう、あんた、浮竹隊長んトコ付いたのねえ。ま、朽木も居るし、当然っちゃー当然か」

「はい？ 何言ってんスカ、乱菊さん？」

恋次の頬が赤く染まるのを乱菊は横目で確かに捕らえ、それから口元に悪戯っぽく笑みを浮かべてから、余っていたお猪口を手にした。

「はい。アンタも飲むわよね？」

まるで当たり前のようにお猪口を恋次に手渡す。新・十三番隊、壊滅の危機が訪れる。このままこのペースに乗せられては、次の日からの業務が大変になってしまうことは明らかだった。この二人と飲む場合は、特に。

「え、ちょ、乱菊さん、これ…」

焦ってお猪口を返そうとする恋次に、浮竹が制止の言葉を入れる。

「恋次くん、ここはしょうがない。京楽と乱菊ちゃんの流れに乗ろう」

「マジっスか…」

うんざりしたように、恋次は浮竹の後ろを付いて行った。資料が今のところあまり溜まっていない（もちろん七緒のおかげであろう）執務室で、小さな宴会が行われていた。

「なあ、恋次くん」

「はい？」

「清音と仙太郎は大丈夫だと思うか？」

「へーきっスよ、朽木隊長、あー見えて結構優しいんで」

その言葉に、浮竹は安心したように手に持っていたお猪口に入っているお酒を一気に飲み干した。その飲みっぷりに、京楽が思わず感嘆の声を上げる。

「おおっ、浮竹、今日は飲みっぷりがいいねえ」

乱菊も間髪入れずに恋次をキッと睨み、

「あんたも飲みなさいね」

軽く脅しのような言葉をかけた。

「…はい」

恋次は、この二人がなぜ組まれたのか、全く理解できないままお酒を飲み干していたのだった。いつ終わるか分からないこの宴会で、浮竹と恋次が自分たちの隊に戻る事が出来たのは、次の日の太陽が見えてからだった。

第二章

窓から、日差しが差し込んでくる。鳥の声で、乱菊は目が覚めた。

「ん…」

目を開けると、机に姿勢正しく座っている見慣れた隊長の姿は無く、未だ眠りにについている京楽の姿。これでもう三日目だ。始めはギョツとしたが、いい加減見慣れたところである。

「きょーらくたいちよう、起きて下さいよお。資料、ものすんごい溜まってますよお？」

「ん…」

寝ぼけ眼の京楽は、ぼりぼりとだらしなく頭をかいて、何か意味の分からないことを言ってから、もう一度眠りにつく。

「京楽隊長…」

これじゃ狭くて、今日からお酒、ここで呑めないじゃないですか、という言葉で喉で止める。部屋が、資料でいっぱいになっているのだ。たった三日で部屋が埋め尽くされてしまうなんて、どれだけの情報や仕事溜まっているのだろう、と思わず普段は思わないことを思ってしまう。

「…隊長…こんな苦労してたんだ…」

その多さに圧倒されながら、思わずそう独白していた。

時刻は、午前十時。普通ならそろそろ日番谷の「松本っ！ 仕事しやがれ！！」等といった怒号が響き渡る時間帯だ。

「日番谷隊長、他に何かありますか？」

しかし、ここしばらくはその怒号はなく、静かで凜とした七緒の聲が、執務室に響いている。日番谷が筆を置いて、七緒をちらり、と横目で見てから言う。

「いや、もう大丈夫だ。すまねえな、氣イ使わせちまって」

僅かしかない資料を見て、乱菊とは雲泥の差だ、と思う。仕事の速さから真面目さまで、全く違っていた。ずっとこうなら良いのに、とは思っけれど、八番隊の事を想像してしまうと、それはいけない、とも思う。

「残りは隊長のモンだからお前は休んでろ。なんなら、八番隊、覗いてきてもいいんだぜ？」

「結構です！ 隊長には充分に苦しんでもらわないといけませんので」

七緒は、十番隊に来てからずっとこの調子だ。仕事がこなせる人のありがたさをしっかりと感じてもらいたいのだと言う。日番谷はそれに苦笑して、筆を進めた。

「……どーなってるうな、あっち」

あっち、とは八番隊の事だろう。

「知りませんよ、そんな事」

どーなってるも何も、あの二人のことだ、安易にどうなってるかなんて予想はできる。七緒は眼鏡をきりりと上げて、席を離れた。

「では、お言葉に甘えて休まさせてもらいます。用があつたらいつでも呼んでください」

執務室のドアを開けたときに、日番谷が口を開いた。

「八番隊、覗いてくんのか？」

その言葉に、七緒が少し、体の動きを止めた。頬が、少し桜色に染まる。

「ちっ…違いますよ！ 図書館で雛森さんと話してくるんですっつ！」

そう言つて、足早にその場を駆けて行つた。乱暴に、慌てたように閉められたドアの反響音の余韻に少しだけ身を任せながら、日番谷は小さく呟く。

「…分かりやすい奴…」

乱菊の嘘は見抜けないが（もちろん、例外もある）、七緒の嘘なら容易く見抜けそうだ。日番谷は止めていた筆を、再度動かした。しかし、それも不意に止まる。資料をトン、と机で揃えて、日番谷は

伸びをした。そして、少し翡翠を細めて、軽く身構える。

次の瞬間。

「ひつつーつつ！！ お菓子ーっ！！」

バンツ、とドアが勢いよく開いて、勢いよくピンクの物体が部屋に入り込んできた。日番谷はそれを冷めた目で見ながら、資料がやちるがこの風で飛んではいかないかと少し不安になる。

「…なんだ、お前？」

「あのね、さつきわんわんがここに来ればお菓子が貰えるって教えてくれたの！」

「わんわん…。狛村か？」

「うんっ！」

確かに執務室には浮竹からもらった菓子は山ほどある。やちるにあげてもあげきれないほどの量が。決して間違いではない。

——だが。

（…狛村の野郎オ…コイツが騒がしくて仕事できねえからって俺のところによこすなよな…）

日番谷は手っ取り早くそこらにあった菓子をやちるに投げつけ、静かにここで食べているよう指示を出したのだった。

「あつ、射場さん！ 丁度いいところに♪」

乱菊の甘い声に誘われ、飛んできたのは今だけ十一番隊の副隊長になっっている、元・十一番隊隊員であつた射場である。

「おお、何じゃ松本？ 酒か？」

「いいねえ、射場くん、察しがよくて。呑もうか、一緒に！」

阿散井たちと同様の事になったのはいうまでも無い。そしてその後、射場がこつぴどく検八にいじめられたのも、言うまでも無い。そして、更に言うなら、七緒がこの状況を見て安心して踵を返すことができなかったのも、言うまでも無い…。

第二章（後書き）

次回は京楽さんメインになりますよぉ♪
京楽さんファン、お楽しみに♪（笑）
あ、もちろん乱菊さんもですので^^

第三章

「んー…流石にこれはまずいかもねえ…」

京楽は山ほどに積み上げられた資料の山を見て、そう呟いていた。こんなものを今更やる気にはならないけれど、やらなくては明日には七緒が帰ってくる。そしたらどうなるか、なんて事は安易に予想はできていた。お酒禁止、どころではない。

「京楽隊長、やりましょう!!」

乱菊が、意を決したようにそう言った。乱菊も京楽としばらく酒が呑めないのが嫌なのだろう。かなりやる気になっている。二人は一斉に筆を握り締め、片っ端から資料を片付けて行った。

「…ん？」

どんよりと背中を丸めて、丁度通りかかったのは、吉良だ。

「吉良！ アンタちよつと手伝いなさい！」

「ええっ！？ ぼ…僕ですかっ！？」

「吉良なんてアンタしか居ないでしょ！ 早くこっち来なさい！」

吉良は少しためらって、渋々口を開く。嫌だ、とは言えないのは、吉良の性格上だろう。

「…あの、松本さん…。僕、涅隊長の副隊長なんです、今」

「へー、そう。確かにネムなら隊長業務、しっかりやってくれそうよねー」

「いや、そうじゃなくって…」
「いいから、早く手伝いなさい」

乱菊に鋭い瞳で睨まれて、その場で蛇に睨まれた蛙のように、身動きができなくなっていた。

「何をしているんだネ、君は？」

ゾクリ、とするような声が聞こえて、元々動けなくなっていた吉良と、乱菊、そして京楽までもが一斉に動きを止めた。

「なぜこんな所で油を売っているのかネ？ 早く資料を運べと言っただろう？」

「きつ…吉良、早く資料運んできなさい！！」

「吉良くん、できるだけ急いで！」

乱菊が言い、京楽も慌てて付け足した。吉良は急ぎ足で駆けだして、資料を取りに向かい、マユリの気配が消えるまで乱菊たちは息すらできないほど身動きをしていなかった。

「はあ…緊張しましたねえ…。涅隊長が来るなんて思わなかったんで…」

「僕もだよ…。さ、仕事の続きをしよう」

すると筆が滑る音が部屋中に響き渡る。
しかし。

慣れない事はするものではない。すぐに集中の糸が途切れた。

「そうなんだよ、あのお酒の魅力つてのはさ…」

「そうそう！ 京楽隊長、分かってるう」

何だかんだでやり始め、何だかんだで中断。こんな集中力の無さで、仕事に片づくわけもない。明日の午前九時までが刻限なのだが、今は午後九時。ぴったりあと十二時間。

終わるのか、と聞かれたら、二人は確実に首を横に振るだろう。まあ、これが日番谷と七緒の二人なら意地でも終わらせようとすることなのだが、なんせ京楽と乱菊だ。無理と分かっているものを無理にやる必要もない。再び、お酒の話で盛り上がる。

「京楽隊長！　今月の瀨霊廷通信…って、うわあっ！」

資料が崩れる音とともに、悲鳴が聞こえた。間違いない、女の子の悲鳴。誰かは分からないが、確実に女の子の声だ。いつの間にか京楽は仕事には見せない迅速な速さで資料を掻き分け、その女の子を助けていた。その速さは、乱菊が圧倒するほどである。

「大丈夫かい？」

「え、あ、すみません！　資料、ぐちゃぐちゃにしちゃって…」

自分が崩した資料を拾い上げ、まとめていく。乱菊は、やっと整った資料の先からその女の子を見ることが出来た。

「雛森？」

「あ、乱菊さん！　お久しぶりです！」

ぺこり、と頭を下げたのは五番隊隊長権限代行の雛森だった。因みに、今は…

「これ、瀨霊廷通信です。届けにきました！」

九番隊の檜佐木と交換中だ。乱菊は京楽の変わりにそれを受け取り、表紙を少しだけ見て雛森を見る。

「あんたも大変ねえ。よりによって九番隊と変えられるなんて」

「まあ…そうですね。確かに十二番隊とか十一番隊とか入るのは怖かったです…」

少し照れながら、頬をぼりぼりと人差し指で搔いた。でも、と雛森は続ける。

「檜佐木さんも毎月こんな大変な事してるんだな、って思ったらなんか頑張れました。五番隊の仕事って日番谷くんがいつも持ってるっちゃってあんまりないから…檜佐木さんがこんなに大変な事してるなんて知らなくて」

ホント、隊によって凄い差なんですな、と苦笑して付け足した。

「そうねえ…ホント、凄い差よ」

今溜まっている資料と、今の十番隊の様子を考えると、恐らく天と地ほどにも違うだろう。はあ、と乱菊はため息をついた。雛森はその様子を見て、口を開いた。

「あの、あたしも手伝いましょうか？」

「えっ？」

よほど驚いたのだろう。意外にも京楽がそう言った。

「いいのかい？ 桃ちゃん」

「はい、仕事ももう終わりましたし…大変そうなんで」

「ありがとう、雛森！！ あんた、日番谷隊長よりサイコーだわっ！！」

「いたたたた、痛いです！ 乱菊さんっ！」

がしい、と雛森に後ろからもの凄い力で抱きつき、お礼を言う。雛森は乱菊から解放された後、筆を握り、二人とともに仕事を進めていた。

京楽と乱菊が話し始めると雛森がそれを止める、ということが何度かあり、時刻は夜中の十二時に差し掛かるところだった。

「ふわあ… やつと半分終わりましたね…」

雛森が小さくあくびをしてそう呟いた。乱菊が、再度筆を握ろうとした雛森の手首を優しく掴んで、言う。

「もう良いわ、雛森。病み上がりなのにここまで手伝ってくれてありがとう。あとはあたし達だけで大丈夫だから」

「そうだね、もう夜も遅いし、帰ったほうが良い」

「え？ そうですか？」

雛森は静かに筆を置いてそう言った。京楽は言う。

「桃ちゃん、君の優しさは嬉しいけど、君の体調を考えるともうこれ以上無茶はさせないほうが良いと思うんだ。分かってくれるね？」

乱菊はこの説得の仕方を見て、浮竹と似ている、と感じた。昔からの仲だから、似てくるのだろうか。それとも、もともと似ていたのだろうか。どちらにせよ、京楽の普段の軽率な行動が嘘であるかのような真剣な眼差しが雛森を見つめていた。

「分かりました。では、お二人とも頑張ってください」

雛森は静かに戸を開け、そして静かに戸を閉めた。ボタン、と完全に戸が閉まってから、少しの間沈黙が流れる。そして、何を合図にしたわけではないのに、二人とも一斉に筆を滑らせていた。

第四章

——京楽達が仕事に追われている頃……

「明日でこの楽な状態も無くなるんだろうな」

日番谷は呟いていた。仕事が無くても机についているのは普段の状況上での癖なのだろう。七緒はたった今読み終わった本をパタン、と閉じ、眼鏡を少し上げた。

「そうですね。あたしも、明日になったら京楽隊長のお守りです」

「『お守り』……ねえ。俺も似たようなモンか」

二人して似たような状況にあるのか、やけに話が進んでいた。京楽と乱菊が、お酒の話で盛り上がるのと同じように。

「酔いつぶれて頭とか思いつきりぶつけないと良いんですけど……」
「四番隊、誰か連れてったらどうだ。あそこは特別に副隊長取り替えてねえみてえだし」

四番隊だけは、治療専門。ということでもしもの時の為にいつでも対応できるよう副隊長の取替えはしていない。

「いえ、仮に頭ぶつけて仮死状態だったとしても絶対に連れて行きません！」

七緒はそう言い切ると、時計をちらりと見た。

「あと……十二時間、ですね」

時計の針は、午後九時を指していた。午後九時、といえば京楽と乱菊が仲良くお酒の話題で盛り上がっていた頃であろう。こちらもちらで、盛り上がっていたようだ。

「そうだな。八番隊に戻って資料まみれじゃない事を祈つとくぜ」

「…ありがとうございます」

「暇が開いたら、仕事、少しやってやろうか？」

「いえ、それだけは遠慮しておきます。自分の隊の仕事は、自分でこなさなくてはいいけませんので」

すっかりしてる、と日番谷は思う。これだけすっかりした副隊長が居るなら、サボりたくもなるだろうとは思うが、流石に京楽は甘えすぎではないだろうか。

—— 今回のこの変な祭りのおかげで、少しは反省したんじゃないかねのか…？

日番谷はそう思って、ハツとした。

「…そう言うことか…。総隊長、よく考えてやる…」

「え？ どうしたんですか、日番谷隊長？」

「いや、なんでもねえよ」

肘をついて、七緒から意地悪そうに顔を背けた。

「明日になったら、何か変わってるかもな」

「…？」

七緒は、何も分からずただ首をかしげるだけだった。不意に、日番谷は立ち上がる。

「悪い、伊勢。少し出かけてくる」

「え？ あ、はい」

ドアがパタン、と閉まってから、七緒は一人呟く。

「…日番谷隊長って…たまに何考えてるか分からないのよね…」

日番谷が足を運んだのは、一番隊の隊舎だった。
真つ先に視線に入っただのは、絶対に一番隊には寄り付かないような、
そんな人物だった。

「…大前田？ なんでお前がこんなところに居んだよ？」

「日番谷隊長、なんスか、俺が居たら何か悪いんですか。大体――

――

「あーあー、悪かった悪かった。お前がここに居ても何も悪くねー
よ。…それより、総隊長は居るか？」

長くなりそうな話を適当な場所で切り、速攻で本題に切り替える。
こんなことは、乱菊とのやりとりで慣れていた。案の定、大前田も
簡単に乗ってきたのだった。

「総隊長？ 総隊長ならあつちに…」

「そうか、分かった」

それだけ言つて瞬歩で消えてしまった日番谷に、大前田は「礼くら
い言えよ…」小さく愚痴を言つて、副隊長室に踵を返したのだった。

日番谷は、今の一番隊の状況を見て、「雀部のままの方が良いんじゃないか…？」と呟いた。

「失礼します」

「その声は…日番谷隊長じゃな」

ゆっくりと引き戸を開けて、日番谷は総隊長の前へ歩み寄る。適度な距離になったところで、日番谷はその場で腰を下ろした。

「総隊長もよくやりますね…」

「何じゃ、気付いてしまったのか」

「…まあ、一応。俺達の隊『だけ』でよかったものを…怪しまれるからってわざわざ他の隊までやんなくても良いんじゃないスカ」

はあ、と日番谷はため息をついた。

「確かにそうじゃが…他の副隊長にも貴重な体験じゃと思つての、やらせてみたのじゃ」

「『みたのじゃ』って…吉良とか結構ビビってましたよ、流石に」

総隊長はほっほっほ、と呑気に笑って、「まあ」と話を切り替える。

「もうその貴重な体験も終わるからの。松本が変わったかどうか、しっかり確かめるが良い」

「…りょーかい」

日番谷はため息をついて、腰をゆっくりと上げた。扉を出る直前にピタリ、と動きを止めて、総隊長を振り返った。

「ま、多分三日と続かないと思いますよ、俺のところは」

そう言って、日番谷は静かに戸を閉めたのだった。

「日番谷くん、瀨霊廷通信…あれ？」

「あら、雛森さん。日番谷隊長は今使用で出かけてますよ」

雛森が十番隊を尋ねたのは、もちろん八番隊に行く前である。

七緒は雛森から瀨霊廷通信を預かり、雛森と話し込む。本の話から始まり、今は八番隊の話である。

「雛森さん、八番隊って、もう行った？」

「あ、今から届けるところです。やっぱり、心配ですか？」

雛森がにこつと微笑みながら言い、七緒は必死にそれを否定する。

「ちっ…違うわよっ！ちゃんと仕事してるか心配で…」

「えへへ、いい事聞いちゃった！八番隊行ったら仕事量確認したらあたし、手伝いますね！」

雛森はそう言って、明るく駆けて行った。

「ちょっと、雛森さん！貴女、まだ怪我治ったばかりじゃ…」

「だいじょぶだいじょぶ！それじゃーね！」

その声はどんどん小さくなり、七緒の声は届かなくなっていた。

…つまり、雛森が仕事を手伝ったのは初めから決まっていたも同然だったわけである。七緒は諦めたようにため息をついて、瀨霊廷通信を渋々読み始めたのだった。

第五章

「只今帰りました、京楽隊長」

ドアを静かに開けて、七緒が十番隊から帰ってきた。

「おかえり」

京楽の声を耳に留めながら、窓まで歩み寄った。窓を全開にして、空気を入れ替える。鳥の鳴き声とともに、柔らかい風が七緒の頬を撫でた。

「七緒ちゃん、仕事、終わったよお」

「そうですか。でしたら、どうぞ呑みに行って下さい」

七緒がきりり、とそう言うと、京楽はカゴから解放された鳥の如く、部屋から飛び出して行った。やればできる人なのに、と七緒は思う。これだけ速いんだったら、呑みに行く前に終わらせれば、と。

何の気なしに、資料をひよい、と手にとった。隅々まで、しっかりと報告が書かれている。

「ホントに、あの人は…」

その見事な報告書の出来具合に、思わず笑ってしまうほどだった。

「…これが、続けばいいんだけど」

と、小さく呟いて、自分の仕事量に目を向けた。前とは比べものにならないほど減っている。手に持っていた資料を机にきれいに置い

て、筆を握る。一気に仕事を進めていった。

「馬鹿野郎っ！！」

日番谷の怒声が響いた。無理もない。

「離れろ、松本！ 暑苦しいんだよっ！！」

急に帰ってきたかと思ったら、いきなり抱きついてくるのだから、叫ばずにはいられないだろう。いくら怒鳴られても、乱菊が離れる気配は無い。

「隊長おー、あたし、隊長じゃないとやっぱり生きていけませえん！」

「分かった、分かったから離れろ！！」

「離れません！ あたし、もう隊長から二度と離れません！！」

ぎゅうううう、と容赦ない力で締め付けられる。既に、その力は「抱きつき」の度合いを超えて、「締め付け」の部類だろう。下手したら、窒息死だ。

——…そんな下らねえ死に方だけはしたくねえ…っ！
日番谷は死の危険を感じて、小さく呟く。

「…仕事、増やすぞ」

その言葉に、一気に腕が緩んだ。その隙を見計らって、するりと腕

から抜け出す。乱菊が、「あ！」と声を上げた。

「松本、早く机につけ！ 仕事するぞ！」

「あ、はい！」

その素直さに、思わず啞然とする。ここまで効果があったか、と。

「どうしたんです？ 隊長。ぼーとしちゃって」

「え？ ああ、いや、何でもねえよ」

サツと視線を急いで乱菊から視線を逸らし、筆を握って、墨を含ませた。乱菊が怪訝そうに机に向かって、筆を日番谷同様に握る。集中した乱菊を見つめて、日番谷は頬杖をついて、筆を置いた。

「…すっげえ効果…」

その天と地ほどの違いに、日番谷は小さく笑った。

しばらくして、乱菊が伸びをする。それに気がついた日番谷が、静かに言う。

「終わったのか？」

「はい！ 慣れないことするとやっぱり疲れますねえ…」

「それは慣れてねえお前が悪りいんだよ」

筆をピツ、と乱菊にむける。乱菊が「はーい」と気の抜けた返事を
して、自分がやり遂げた資料の分厚さを見る。

「ふえー、あたし、結構やりましたねえ」

「…まあ、今までに比べればやってるな」

いままでゼロだったし、と心の中で思う。日番谷の仕事量が格段に減ったのは事実だが、言葉の一つ一つでやる気をなくされても困ることができるだけ言葉を選んでいた。

「それじゃ、呑みに行ってきます！」

「…あー、行つて来い。明日に支障が出ないくらいになー」

ひらひらと手を振って、いつも通り適当に見送る。お茶を啜って、コトン、と湯飲みを置いた。風でなびいているカーテンを見て、窓の元に立ち寄る。

「…たく…こんな暇な日は初めてだぜ…」

窓から外を見つめて、空を仰ぐ。真つ青な空に、思わず飲み込まれそうになった。羽織っている隊首羽織がバサバサと音を立てる。同時に、銀髪も乱れた。

「京楽のところで…相当なトラウマにあつたんだろうな…」

——…一晩で大量の資料を仕上げた、とか。
と、思わず想像してしまう。

「まあ、そのトラウマのおかげで俺が楽できるんだけどな…」

そう言つて、少し笑ってしまう。この暇な日が、一体どれくらい続くか。そう考えると、思わずゾツとした。

「…三日で終わったら困るけどな…」

——三日後。

「京楽隊長！」

「なーに、七緒ちゃん」

「…この報告書、白紙なんですけど」

「え？ えーと…しーらないっ！！」

「あ、ちよっとー！！」

「松本、お前、仕事はどうした？」

「え？ し…しましたけど」

「…手に持ってるのは何だ」

「ふ…筆？」

「酒瓶だろっ！！ つーか語尾が疑問系になってんじゃねえかつ！！」

「い…行つてきまーすっ！」

「おい、松本っ！！ あの野郎オ！！」

お酒の誘惑には、どうも勝てないらしい。

七緒と日番谷、二人の苦労は、未だ耐えないままだ…。

f i n . . .

第五章（後書き）

予定通りのものになっていれと思います。京楽さんと七緒のコンビは崩しちゃいけないな、と感じながらこの小説を書いていました（笑）

乱菊と日番谷も絶対に離れ離れにはいけない、と再確認しながら書き終えたこの小説、楽しんでいただけたら、と思います。雪莉サマへ、流羽奈より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4086h/>

副隊長取替え祭

2010年10月9日05時55分発行